

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	硯友會詩歌：文苑
Author(s)	芝峯；鐵州；江陽；桃江；基紀；蘆月；奇熊；稼堂；眞榮；孝；破村
Citation	龍南會雜誌， 6 9： 4 5 - 4 7
Issue date	1898-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5190
Right	

たえてはらはむ術もかな。』
やがて微突む星一つ。

西山陰に沈む日の
心のやみに照らざらば、
消えよ光の甲斐なさに。』

麓の里に暗むそめて、
暗黒に入りゆく夕日影。
月江上の秋の黄昏、

父の世の末の姿あり。
我世すずしと照らしつゝ、
彼方に遠へ浪の音、

我恐るし思あり。』
無聲にまざる思ひして、
唯淨界のにはひあり。

闇路の露にそぼちつゝ、
忽ち起る風いたみ、
雲は愁ひて光消え、

嶺し獨り逍遙ひつゝ、
白波いたく吼えくるひ
神の慈愛のまなざちか

遙か澄みそむ大空に
見ぬ翼に黒暗飛びて、
根は長し雲の上。』

硯友會詩歌

紅葉の下行く水もあやにまき心してさせ繪津の河舟
芝 峯

あやにしきさらす河土のもみち葉はちりても浪にじきたへて花
山井のあさき流に秋の色の深くもにはふきしの紅葉
はてはまたいつこの瀬にかにはふらむ散りて流るゝ峯の紅葉
夕日影にはへる水にもみち葉の波のあやれる玖磨の川面
影うつる鏡か淵の薄紅葉水にも秋の色は見えけり
行舟の影もかくるゝ川霧の絶間に匂ふ檻の一もと
白川の岸のもみち葉秋おいぬ水紅に今はそめけり
白川の波のうねうね色どるは風のたくめる紅葉なるらん

雁聲稀(全)

を山田のおくてのいねもあるものを今はまれなりこしの雁金
此ころは雁の羽風の音たへて葦の枯葉を名残とそきく
世をうしと雲にや雁も入にけむ沼田をわたる聲たにもなま
れどつるゝ雁さへまれになりにけり何處か秋の初めなるらむ

村家菊(即題)

菊の花八重九重にさく頃はひなも都もへたてさりけり
賤かやにれくれてにはふ菊の香のふかきや花の心なるらむ
訪ふ人のありやなまやとまら菊の淋まゝ立る賤の庵哉
なかゝに露に色香の深きかなまつか垣根の白菊の花

鐵州

江陽

桃江

基紀

蘆月

寄熊

桃江

寄熊

蘆月

鐵州

鐵州

稼堂先生

芝峯

桃江

